

パンプスのかかと、マンホール の穴

hichakko

道路の真ん中で、女が一人羽ばたいていた。

両手を上下にバタバタさせて、はたから見れば挙動不審なことこの上ないが、よくよく観察してみればパンプスのかかところが自分の高さを見失うくらい、マンホールの穴にがっばり食われている。

一度靴を脱いで手で引き抜いた方が早いと思うが、相当テンパっているらしく、どうにかして立ち姿勢を維持したままで抜きたいらしい。

しばらく見守っていたが、一向に飛び立つのを諦める気配がないので、仕方なく手を貸してやることにした。

羽ばたいている左手を捕まえ、前かがみになりながら自分の肩に引き寄せる。

「ちょっと掴まってろ」

女は少し戸惑った後、おずおずと俺の肩に手を預けた。

「靴、脱げ」

俺の指示通り、女はパンプスから自分の足を引き抜いた。

と、その時、女の身体がバランスを崩して揺らいた。

片足だけで自分の体重のほとんどを支えようとしたからだろう。ただでさえヒールが高い靴を履いているんだから、平衡を保てなくなるのも当然だ。

だから先に肩を貸してやってたのに。しっかり掴まってないからこうなるんだ。

これは不可抗力だからな、と心の中で言い訳しながら、慌てて女の腰を抱き支える。華奢な腰だった。

「ご、ごめんなさい」

女の謝罪の言葉を聞きながら、内心安堵する。

どうやら誤解されることはなかったようだ。

親切心からやっていることなのに、変質者扱いされたら困る。

だが、このまま女の身体を支えている手を離すのもなんだか不安だったので（またバランスを崩しそうだ）、そのままの体勢で俺はパンプスの発掘作業に取り掛かった。

これが中々しっかりはまりこんでいて、思っていたより時間と腕力が必要だった。いくら羽ばたいても抜けないはずだ。

しばらくしてパンプスを引き抜くことに成功すると、女の浮いている左足の近くにそっと置いてやる。

「ほら」

女はシンデレラの靴を履くように、慎重につま先から滑り込ませた。

靴の中にすっぽり足が収まると、預けられていた体重が一気に軽くなる。

俺も上体を起こして、女の腰からさっさと手を引いた。

「ありがとうございます」

正面から花ひらくような笑顔を向けられて、一瞬だじろいだ。

若い女だということはなんとなく分かっていたが、後姿しか見ていなかったのもこんなに可愛い顔をしているとは想定外だったのだ。

不意をつかれて固まっていると、女は照れながら言った。

「普段はヒールのない靴を履いているので、こういう靴は全然履き慣れてなくて……。今度からマンホールの穴には注意して歩くようにします。本当にありがとうございました」

女が頭を下げた瞬間、甘い桜の香りがふわりとあたりを漂った。

風に吹かれて、淡い桃色の花びらが視界に舞う。

——ああ、春がきた、と思った。

現実の世界にも、俺の中にも。